



島からもっとも近い沖縄 活火山の無人島硫黄島

硫黄島は、徳之島の西およそ65キロに位置し、数百年にわたり硫黄の採掘がおこなわれてきましたが、現在は無人島となっています。空気が澄んでいるときは島影が肉眼でも見え、時に冬の季節風で、硫黄臭が漂ってることがあります。沿岸にはサンゴ礁が発達し直接船が接岸できる港はなく、小さな突堤があるのみです。上陸したとしても、島の周囲は断崖で人の侵入をはばんでいます。小さな島に2つの火山があり、土地はやせ、森林や川もないため耕作はおろか水の確保すら難しく、人が暮らすのには厳しい環境でした。島民や採掘従事者は、幾度となく噴火や干ばつ、飢饉に見舞われ、周辺の徳之島などへ避難したこともあったのです。



硫黄は火薬の材料として用いられ、7世紀ごろ中国で発明されて以降、火山のない中国ではとても珍重される鉱物でした。現存する最古の記録では、琉球王国以前の三山時代、中山王が中国(明王朝)へ硫黄島産の硫黄を朝貢しはじめたのが14世紀後半から。人々が定住した時期は不明ながら、おそらく朝貢以前であろうと考えられています。15世紀前半、琉球王国成立後も中国との交易は続き、島民には年間で硫黄1万6千斤と摺貝(螺鈿細工に用いるヤコウガイなど大型貝類の加工品)800枚の上納を求められる一方で、夫役(労働奉仕)の免除と米の支給がありました。さらに17世紀後半になると支給米が増量されるなどの優遇政策により、移住者が増えてきました。明治36年(1903年)4月、硫黄採掘坑が爆発したことをきっかけに、翌年には国や沖縄県の働きかけによって、全島民が久米島へ移住しました。移住後にふたたび42世帯が入植し、国策企業による硫黄採掘や石うすの生産などを行い、戦前には人口600人に達して、小中学校、診療所、役場が設置されました。しかし昭和34年(1959年)の噴火によって全島民が那覇や久米島へ移住をよぎなくされ、さらに昭和42年(1967年)の噴火で出稼の採掘員も撤退し、完全な無人島になりました。こうした歴史の遷り変わりを経て、硫黄島は鹿児島県でなく沖縄県となっているのです。

もっと情報が見られる
電子版はこちら

